

音楽
領域

声楽、器楽、作曲及び音楽学の各分野にわたる専門研究を基盤とし、音楽教育の理論と実践の深化を志向する研究・教育を行い、音楽教育を総合的に追求します。

また、国際化時代に対応すべく、西洋音楽のみならず日本音楽、民族音楽をも含めたグローバルな視野をもつ音楽科教員としての能力を養成します。

修士論文

- 台湾における音楽教育と統合学習領域「芸術と人文」について
ー台湾の小学校における実践事例と我が国の音楽科教育への示唆ー
- 小編成の吹奏楽における効果的な編曲の研究
- 初期のスクリャーピン

専任教員の研究・教育の概要

吉田 秀文

【音楽科教育】

音楽教育の諸課題を周辺学問領域である心理学や社会学を中心に研究しています。現在は、子どもの学習意欲向上や生涯発達の見点から音楽学習を再検討することを主眼に追究しています。授業では、音楽教育学の理論を文献講読を通して学習したり、学校教育現場における課題を見つけ、それを様々な先行研究をもとに調査を行い、議論します。また、修士論文の作成に向けて、学校教育現場に実際に赴いて実践を行い、理論の検証と展望を行います。

中里 南子

【音楽科教育】

音楽科教育日本音楽における装飾的旋律の機能に着目し、日本古来の装飾的旋律が後世の音楽とりわけ民謡、演歌、現代の若者の歌の中でどのように文化変容を起こし、受け継がれているかを研究しています。授業では、音楽教育学に関する文献講読を通して議論したり、現代の音楽教育における日本音楽の様式理解や、旋律の捉え方、更には日本音楽の指導の在り方を考えていきます。

山崎 法子

【声楽】

声楽専門はドイツ歌曲で、フーゴ・ヴォルフの歌曲作品を中心に研究しています。特に、詩と音楽の関わりについて分析的に研究し、作品理解を深めることで演奏法の可能性を見出します。授業ではこの研究方法をもとに、演奏を通して諸外国の作品の理解に踏み込みます。作曲家の意図を楽譜から読みとり、それを体現していくことは、演奏技術を高めるだけでなく、教材研究を深耕するための手立てとなると考えています。

三國 正樹

【器楽】
ピアノ

器楽におけるピアノ演奏法が研究分野です。特に古典派の演奏法はあらゆるピアノ作品演奏の基本となることから、ベートーヴェンのピアノ作品をどのように演奏するかを課題としています。演奏会のプログラムのあり方も重要な研究テーマで、「連続プログラム」などを実践してきました。授業では現代の器楽演奏分野におけるさまざまな問題を検討しています。

菅生 千穂

【器楽】
管楽器

古典派から近現代の主要なクラリネット作品を中心に、楽器や様式の歴史的変遷、現代の演奏の在り方について、演奏を通して研究しています。室内楽、吹奏楽、管弦楽、同属アンサンブル等異なる演奏形態におけるクラリネットの役割や可能性についても探求しています。授業ではクラリネットに限らず、学校音楽の場で必要となる管楽器や箏など楽器的、教材・教具としての可能性を実践的に学び、教員としての資質向上をめざします。

西田 直嗣

【作曲】

作曲研究する分野は作曲と音楽理論に大別されます。作曲については、音楽教育における創作指導の原点が自ら創作を行う事であることを踏まえて、創造する事の意味を考察しながら自らの音楽世界の構築に取り組みます。音楽理論については、社会における音楽芸術の必要性について考察しながら、和声、対位法など音楽理論の学習、様々な時代の楽曲研究・授業研究を行い、鑑賞教育の可能性の探求、および音楽教育における音楽理論学習についての研究に繋げてゆきます。

川上 晃

【音楽学】

音楽学主要な研究領域は、日本歌曲です。日本歌曲の中の詩のことばと旋律・リズム・和声の関係、とくに、詩のリズムと歌のリズムの関係を中心に研究を行っています。大学院の授業では、小中学校教材を対象に、教材の旋律・リズム・和声、音とことばの関係、また教材の歴史的背景などについて研究を行い、音楽学の立場から教材研究を深めていきます。

美術 領域

美術科教育及び美術の各分野（絵画、彫刻、デザイン、工芸、美術史及び美術理論）についての専門的研究を深めるとともに、理論的、実践的な研究を行います。また、それによって修得した知識と技能を美術教育に生かし、指導的な役割を果たすことのできる能力を養成します。

修士論文

- 彫刻と人形の間 ―日本美術における人型の立体造形表現に関する研究―
- 中学校美術科教育に於けるアートプロジェクト型学習に関する一考察
- 乳幼児期の子どものアート教育について ―子どものアートの共感者としてのアーティストを中心に―

専任教員の研究・教育の概要

喜多村徹雄

【絵画】

安定／不安定などの観点から、絵画的表現に根を持ちつつ立体を混在させた仮設的状况を創り出すインスタレーション表現の実践的研究・検証をしています。また特定の状況や地位資源を活用したプロジェクト活動も行っています。授業では、20世紀以降の絵画表現の歴史の変遷を概観すると共に同時代の表現の多様性について知見を深め、表現することの社会的価値や学校教育における美術教育の意義および可能性について検討します。

林 耕史

【彫刻】

彫刻のもつ立体造形としての意味と可能性を、実制作を通して検証、研究しています。主に木を材料とした彫刻制作を行い、空間及び社会への作用を考察するインスタレーションも試行しています。授業では、彫刻の歴史の変遷を作品鑑賞や文献調査により概観するとともに、材料・技法に関して研究します。その上で造形美術教育の観点で彫刻を位置づけ、それを通して図画工作科・美術科の教育の在り方を検討します。

齋江 貴志

【デザイン】

プロダクトデザインの立場から、デザインにおける基礎造形の研究を主に行ってきました。また近年は、造形だけでなく、中山間地域の地域振興をデザインの視点から実践的な活動のもと研究しています。授業では、今後のデザイン分野の教育を深く考えていくために必要な、近代からの流れを知ること、また、デザインを創造のための思考方法として捉え、教科や題材のあり方について考えてもらいます。

春原 史寛

【美術史・美術理論】

日本近現代美術史について、作家・作品研究のほか、その受容の諸側面について主に研究しています。特に戦後日本において「美術」や「芸術」に社会が期待した役割や、人々が抱いた「芸術家」のイメージの実相を明らかにしたいと考えています。それら成果をもとに現在の鑑賞教育の充実の方法を検討し、学校教育における博物館・美術館、地域文化資源の活用について研究・教育を行っています。

茂木 一司

【美術教育】

身体・メディア+アートの観点から協同的な学びとしてのワークショップに関する理論・実践の研究を進めています。特に障害児者、エスニック、高齢者、経済的などのマイノリティに対するアート学習／支援をインクルーシブな社会構築のために活用する実践研究を進めています。授業では、基礎的な文献の講読の他、大学外(美術館等)でのアートプロジェクトを活用するなど、地域社会との接触を持った実践的内容にしています。研究指導では、個別のニーズに沿ったアクティブラーニングを基本にしています。

郡司 明子

【美術教育】

美術教育における身体性のあり方に着目し、からだ・気づき・対話を重視した教育活動を「アート教育」と捉え、実践化に向けて研究を進めています。これまで身体性の基礎研究をはじめ、衣食住に基づくアート教育の具体的な題材等を提案してきました。からだをほぐし、協働して学ぶやわらかい空間づくりを目指し、幼小の現場等で実践研究を行っています。大学院では、実践を支える理論として、レヅジョ・エミリア市におけるアート教育に関する書籍やデューイの『経験としての芸術』等の輪読を行っています。